

シンポジウム

史学・地理学・考古学戦後十年の回顧と今後の課題

——史学研究会特別例会記事——

報告者

日本史	藤 直 幹	門 協 禎 二
東洋史	貝 塚 茂 樹	河 地 重 造
西洋史	田 村 満 穂	会 田 雄 次
地理学	松 井 武 敏	浮 田 典 良
考古学	水 野 清 一	坪 井 清 足

去る六月三十日（土）午前十時より京大文学部第一教室において、表記の問題についてシンポジウムを行った。報告要旨は左の通りである。

日本史

報告者 藤 直 幹
門 協 禎 二

日本史の部の報告は、戦後における主要な論争とその系譜を辿ること、主要な学術誌の発刊状況と編集内容を検討すること、この二つの点をメルクマールとして進められた。

日本史学界は、終戦直後においてはたしかに一種の混乱状態にあったことは否定できない。しかし、戦前、戦中を通じて少数の学者に続けられていた努力は、研究の自由をとりもどして、資本主義論争およびアジアの生産様式論争をうけて結実しはじめた。前者からは、国家論をめぐる論争・資本主義論争の新しい展開、純粹封建制の成立をめぐる論争等々があり、後者については、石母田、藤間、松本氏らの業績をえたことがそれである。然るにこの時期は、官立大学を中心とする史学は、その学術誌の発行の極端な不振にみられるように、停滞的であつたことは否めない。その一部に、右述の論

争や諸作品のふえる方法や内容に批判を加えることもあつたが、大きな反響を呼ぶことはなかつた。ところが、一九五〇年前後を境して、日本史学界の内部に、権力問題から進んで民族問題が提起されてきた。しかるに、民族問題は多くの人々には問題意識としてなお未

成熟であり、これまで主導的な役割を果してきた理論も、十分に課題に應えることができなかった。逆にこの時期には、旧来の有力學術誌の立直り、新しい學術誌の発刊や旧誌の復刊などが著しくめだつている。しかもこれらの雑誌は一として民族問題をとりあげていない。それらには、編集方針、収載論文とも考証主義的な傾向がおいしく現われはじめている。ここに史学界にも、相対する二つの流れがようやく濃厚になつてきている。しかし、この間にも、戦後五年間の日本史学の發展は、すでに新しく展開しはじめた文化史・思想史などの面にも、もはや政治権力や社会構造を無視してはありえないという条件をつくり出してゐた。また民族問題をめぐつても、そのうちナショナリズム論争や英雄時代論争などが導き出されてきたのであり、そこに旧来の指導理論に対する慎重な検討が始つてきた。そうした努力は、戦後の歴史学の成果を検討しながら、ようやく時代区分をめぐつて、國際的な論争へも連りはじめてゐる。

大要、右のような報告が行われた。時間が不足して、発表者は準備の一部しか報告しえなかつたが、発表後、活潑な討論をよび起

た。そこでは、文化史学の方法、理論と実証とを別々に考えることの誤り等々が主要な討論の素材となつた。

東 洋 史

報告者

貝塚茂樹
河地重造

中国における戦後史学の發展は、一九四九年の中華人民共和国の成立を境として、前後の二期に分けることが出来る。前期は国民政府の下における実証史学復興の時期である。重慶昆明の奥地に西遷してゐた国立中央研究院、国立諸大学等の諸學術機關の南京・北京等の本拠への復歸にともなつて、學術出版も次第に復活してきた。

これとともにわが国で見ることが出来なかつた事変中の出版物も一部分手に入るようになった。辺鄙の言語に絶する困難な環境と、これに引続いた内戦の混乱のなかで研究を継続した中国の学者の不屈の意気には敬意を払わざるをえないが、その研究は戦前の胡適を指導理論家とする実証主義の史学の方向をそのまま継承したものにすぎなかつた。

これに対して、後期の学界を特徴づけるものは、新中国におけるマルクス主義史学である。勿論台湾に遷つた国民政府の下における実証主義史学も、引続いて立派な業績を生んでゐるが、新中国の新史学の勃興が人目を奪う現象であつた。このマルクス主義史学はまずかつての実証主義史学に対する反批判として出發した。胡適の

実証主義的疑古主義の本文批評によつて、不当にその史料的价值を疑われていた中国の古典の再評価が行われた。ネガチブな史料批判から、ポジチブな新史学体系の確立が企図された。

(貝塚茂樹)

社会・経済史を分担したが、一口に十年といつてもながいので、問題史的に整理し、今後の課題を導きだすように心掛けた。戦後の動向でまず注意されたのは、オーソドックスな研究の復興と、そのなかにみられた新しい様相——たとえば古いアジア観にかわるべきアジア史の新構想の追求、新たな方法や史料の導入など——であり、もう一つは、マルクス史学にもとづく歴史の発展法則およびアジア史の特殊具体的なすがたの究明、停滞論的理解の克服の試みであった。たとえば、古代都市国家論——周代封建制の本質の解明、居延漢簡による漢代の基礎的研究、元典章・明清の塩業・雍正硃批諭旨などの研究をふくむ近世論の新展開などは前者に関しており、秦漢帝国をめぐる古代帝国論の問題提起と批判、唐宋変革をめぐる時代区分論争、地主・佃戸制、ギルド、明代綿業などを手掛りとした封建制および近代化過程の研究等々は後者にかかわる。また歴史学研究会が民族の問題を提起してのち、それまでの研究を靜態的な構造論とする批判もおき、農民反乱や激動期の政治過程に関する一連の研究もうみだされた。それは歴史を推進させた各階層の人間の主体

的条件を追究し、発展法則を動的に把握しようとしたものであった。しかしこの試みも、方法的貧困さを克服しえず、むしろ実体にそくした着実な研究を輕視し、公式論に逆転する危険もまじつ、しだいに沈滞の様相を濃くしてきた。だがそれとともに、最近では新たな転換のきざしも明るくなつてきている。殷周社会の基礎構造、秦漢帝国の本質、封建制社会の生成などの課題のなかに新しい成果が期待されるし、近代化過程から現代史にいたる研究も、やがて資料整理と個別研究の段階をこえ、基礎構造の研究と統一された体系的把握にすすんでいくと思われる。(河地重造)

西洋史

報告者

田村満穂
田雄次

わが国の西洋史学界における社会経済史の部門での具体的問題として、従来大きな影響力を持ち、また今後も研究の出発点になると考えられる大塚史学の展開並びにその批判をとりあげてみた。

まず大塚史学の展開という面から論点を整理し、(一)ドブブースウィージー論争に關聯する封建制崩壊の要因、(二)「局地的市場圏」論、(三)共同体理論などの諸問題をとりあげ、簡単な解説の後、封建社会における商品生産——流通をより構造的なものとして捉えるべきではないか、また「隔地間商業」と「局地的市場」を對抗的にのみ考えるところに無理が生じはしないか、など若干の疑問を提出。

つぎに大塚史学に対する批判という視角から論点を整理し、(一)資本主義の二つの途、「商業資本」対「産業資本」の問題、(二)ヨーロッパ、ジェントリー、寄生地主制の問題、(三)絶対主義論、(四)市民革命論の四点をとりあげ、それぞれ、矢口、白杉、越智、吉岡、河野諸氏による批判を解説しながら、今後に残された問題をも併せて考えてみた。

結局、大塚史学は広汎な理論的体系であり、これが戦後の実証的研究の進展に果たした役割は大きく、尚それ自身新たな理論を導入することによつて新たな発展を見せつつある。しかし一方で、これに対する批判が提出されたということは、それだけ実証的研究が進んだことを意味するが、それはやがて体系的な理論にまで高められねばならない。単なる実証的批判は心ずしも研究を一步推し進めるものではない。それが為には、理論と実証の共同作業が要請される。その場合、実証的研究は大塚史学が極めて現実的地盤から出発したものであつたことを想い合わせて、非生産的なアカデミズムに陥る危険を排除しつつ進まねばならない。

なおついで会田雄次氏より戦後史学の批判が提示された。

地理学

報告者

松井 武敏
浮田 良敏

戦後数年間は、研究の困難な事情のため、地理学の研究も、不振

であつたが、やがてその好転と共に、戦前以上に活況を呈してきた。特に、人文地理学の研究が盛んとなり、この分野では、文化科学ないし社会科学の方法や成果の刺激を受け、その研究が充実を示しつつある。そうして、地理学は、戦前よりも、教育における意義を高めたばかりでなく、政治的啓蒙よりも、経済的施策に大きな寄与をなすに至つてゐる。

地理学の対象や方法に關しては、幾多の問題はあるが、その中心課題と目される地域構造の究明や人文ないし社会現象と環境との關係の考察は、著しい進歩を示した。前者では、景觀論的、形態論的ないし分布論的研究から性格論的、機能論的ないし構造論的研究へ、後者では、いわゆる決定論から可能論、更には代償論ともいふべきものへと進み、この両者のいずれにおいても、その研究に當つて、歴史的発展の程度の差が、考慮されるに至つた。また、地理学は、多くの科学と境を接し、その境界領域の研究にも、すぐれた業績を生んだ。しかし、現状では、なお地域構成要素相互間の中心事象と派生事象、地域相互間の支配と従属との關係、社会の歴史的展開の地域差などの把握、また、例えば、経済地理学の分野についていふならば、土地制度、資本の在り方、経営内容の分析などに不十分な点が感ぜられ、今後解明されなければならない多くの問題を残している。(松井武敏)

戦後一〇年の地理学の歩みを、環境論的な側面と地域論的な側面に分けて考えると、次のような諸点が注目される。

まず環境論では、自然環境が人間の生活になんらかの現実的意味を持つのは、人間の社会的労働過程を通じてであり、従つて自然環境は常に歴史的であり可変的であることが明確に認識されるようになった。そして耕地・山林・水などの問題を通じて社会的存在としての環境の意義が追求されているが、その場合歴史地理学的観点よりする研究が多い。一方環境の持つ潜在的な力の測定や人類対環境の生態学的把握もなされている。また地理学の応用性・実践性への指向として、開拓・資源問題・国土保全・災害などの問題がしきりに取り上げられている。

次に地域論では地理学における地域総合調査や他科学における地域研究の隆盛を通じて、地理学の研究対象が何よりもまず「地域」であることが強く認識されてきている。そして地域の構造的な理解が指向され、モザイク的な地域観ではなしに、地域の圈構造的な把握あるいはいわゆる地域構造論がさかんであるが、その場合「構造」に対する考え方は区々であり、地域論には今後に残された課題が多い。

かかる地理学の動向を、具体的な個々の業績約五〇篇を例にとつて示した。(浮田典良)

考古学

報告者 坪水 野清 足一

〔中国関係〕 戦前の考古学が研究地域を限られていたのに対し、戦後は中国の基本建設工事に伴つてその範囲が全土にひろがつたことは大きな特色である。その結果発見された資料はおびただしい数であるが、それによつて従来の考へ方を根本的に改めねばならぬような面は少く戦前までの説を資料的に傍証したとみるのが妥当である。大きな変革をもたらした分野としては、先史時代の彩陶・黒陶・印陶の分布及びその性質がわかつてきたことがあげられる。特に印陶は紅陶系土器として南方との関係が重要視される。原史時代では鄭州二里岡において龍山文化と殷代文化とが層序的に把握されたこと、遼東や長沙で戦国時代の墳墓が大量に発見され、前者について大部な報告書が発刊されたことは大きな成果である。(水野清一)

〔日本関係〕 戦後における重要な発見発掘十数例について幻燈を使用して解説した。まず新しく開拓された分野として縄文式以前の無土器文化の遺蹟が本州各地で注目されるようになった。縄文式時代では特殊な遺構として秋田県大湯町環状列石その他の埋葬資料の見るべきものがある。弥生式時代では縄文式文化との関係で注目される福岡県板付の発掘があり、山口県土井浜、彦岐ミヤクリその他北九州のドルメンの調査では埋葬について、静岡県登呂では住居関

係の豊富な資料が得られたことが著しい。古墳の發掘は戦後目ざましいものがあるが、中でも古式古墳の調査が進み、構造あるいは遺物の副葬状態についての知見が増した。例えば福岡県一貴山、大阪

府黄金塚、紫金山、三重県石山等の諸古墳があげられる。寺趾関係では奈良県西大寺、飛鳥寺、興福寺などが組織的に調査され、その遺構が明かになった。

(坪井清足)

万葉集に見える夜の船出

熱田津に船乗りせむと月待てば潮もかなひぬ今はこぎいでな

(八)

万葉集巻一に見える額田王の有名な歌であるが、何故に夜船出をしたのであろうか。潮の都合かと考えられるが、それだけなら潮汐の干満は一日二回あるのだから日中満潮の時を利用した方が便利であろう。何かの事情で偶然船出が夜になったのかも知れないが、天平八年の遣新羅使の歌を載せた万葉集巻十五にも夜の船出を語るものが二つある。即ち

(1) 月よみの光を清み神島のいそまの浦ゆ船出すわれは

(三五九九)

(2) 従長門浦船出之夜、仰觀月光作歌三首(三六二一—三六

二四の歌の前書、歌は省略す)

であって、夜の船出が単なる偶然ではなく、当時の航海における一般的な方法であつたように思われるのである。それは瀬戸内海に特

有な陸風海風を利用するために起つた航海術ではないであらうか。風間は陸の方が海より強く熱せられるために海より陸へ風が吹き、夜は逆に陸より海へ吹く。船出を容易にするためには海に向つて吹くこの夜の風を利用すればよい訳である。ブチャー著「ギリシヤ文化の特質」(諸角克夫氏訳)によれば、ホメロスの中にもエーゲ海に起る陸風海風を利用して、夜船出する場面の描写があると言う。もとより帆を使わずに櫓に頼る小船は別であるが、右に挙げた諸例の場合は何れも当時としては大船であらうから、帆を張っていたに違ひなく風の向きは無視できない筈である。こうして陸風利用の船出と見ることによつて、これらの歌の理解も一層深まるのではなからうか。特に額田王の歌は、月光の下、銀波をくたく満潮を前にして船装いになった軍船のくろぐろと居ならぶ静中動の一瞬を捉えた名歌として古今に喧伝されるが、膚寒く吹き過ぎる夜風を受けいっぱいに張つた帆と、風に鳴る帆綱の音とを想像する時、この歌の味わいは画龍点睛を得るものと思う。

(K・N)